

北海道地域福祉学会ニュース

No. 3

発行日

1995年7月1日

発行

北海道地域福祉学会

会長 忍 博 次

仙人が教えてくれたこと

北村 久美子（道立衛生学院）

「緑のそよ風いい日だね、蝶々もひらひら豆の花…」と鼻歌交じりで飛び回っていた新米保健婦の頃である。私は、経験豊富な3人の保健婦が駐在保健婦として活躍しているH町（当時の人口約8千人）に就職した。先輩保健婦は昼夜をわかつた地域住民の健康に関する相談はもとより子供の進路指導等各種相談に熱心に応じていた。私は新米ということで役場勤務であったが、時には担当地域に駐在する日もあった。すると仕事が終わった夕刻、その地域の人々が注射液を持参して「注射をして欲しい」「足をケガしたので診て欲しい」「病院から薬をもって来て欲しい」等とやって来たのには驚いてしまった。また、先輩保健婦や役場の福祉担当者が、住民一人ひとりをきめ細やかに見守り、献身的に支援している姿に感動したものである。特に、先輩保健婦には「看護の心」を、そして長年福祉行政に従事していた役場の担当者からは「福祉の心」を教わった。

H町ではこんなことがあった。長年勤務した職場を無事定年退職したAさんは、こともあろうに退職金を全部賭け事に使い果たしてしまったのである。Aさんは家族に申し訳ないと言って、遠く人里離れた山奥の古い飯場小屋で隠遁生活を始めた。その為、私たちはAさんのことを「仙人」と呼んでいた。Aさんは残雪の時期になるとソリを引いて、塩等日用雑貨の買い出しに山から下りて来ていた。Aさんは結核検診を始め各種検診に来られなかったため、その地域の結核検診率は残念ながら99%であった。検診率100%に達しないことよりもAさんの健康を常に案じて駐在保健婦は、Aさんの住む山に向かって毎日「どうか今日一日Aさんが無事でありますように」と合掌していた。また、役場の福祉担当者は地域の小学校の教師と一緒に冬、Aさんの生活が心配ではるばる隠遁の地まで出かけて行った。冬はスキーでの訪問である。私も一度同行するよう誘われたが何かの都合で応じられなかったことが、今でも悔やまれてならない。その福祉担当者からAさんの様子を詳しく教えてもらい安堵の胸を撫で下ろしたものだ。様子を聴くと、玄関の戸は無く筵一枚、電気やランプも無く太陽と共に生活し、室内は暗く囲炉裏で暖をとり食事を作っているという。熊が出没するため長い棒の先に出刃包丁をくくり付けて、いざというときに備えている。戸外には穴が掘られてあり病気になった時には、その穴に転がり込んで死ぬのだという等々…。そこには、Aさんの家族ばかりではなく保健婦、福祉担当者、小学校の教師等が、自分たちの問題として彼方の山中にひっそりと住むAさんの身の上を案じ熱心に見守る人々がいた。尊い一人の人命を救うため、行政や職域の枠を越えみんなが腕を組んで真剣に対処することの大切さを、Aさんは命を賭して教えてくれたように思う。

5月12日は国の施策として平成3年から「看護の日」と定められ、各地でイベントが催された。国民一人一人に「看護の心」を大切にしていだこうとするものであるが、この趣旨が十分浸透するよう願ってやまない。

オランダにおける コミュニティワークの取り組み

中野区上高田地域センター所長 山下 清 超

はじめに

今年の2月始め、オランダを訪れ日本に比べ充実したコミュニティ・ワークの取り組みを視察する機会を得た。勤務先の海外派遣研修としてであったが、その際、北星学園大学の杉岡教授に大きなお力添えをいただいた。見聞きしたあらましを報告しお礼に代えたい。

オランダの都市

オランダは人口1500万人余（1991年）、国土の面積は4万1785㎢（九州にほぼ等しい）というヨーロッパでも比較的小さな国である。人口10万人以上の都市は全国に17あるが、首都アムステルダムでも約70万2千人（面積約162㎢）、第2位の都市ロッテルダムが約52万2千人（約201㎢）、3位のハーグが約44万4千人（約65㎢）、4位のユトレヒトが23万1千人（約54㎢）という規模である。これらの4大都市は、オランダの中西部にまとまって位置しており相互に列車で30～40分ほどの距離にある。また、他の都市と異なり行政権能上、州と同等の扱いを受けている。

オランダが直面する経済・社会面の最も大きな課題は、10%を超える失業率の改善を図ることである。

小地域支援事業「フレッセマン・プロジェクト」（アムステルダム）

アムステルダムの旧市街は現在16の地区に分けられ、各々の地区は平均1万5千人程の人口を擁している。旧市街は高齢化が郊外よりも進んだ地域であり15%を超えている。フレッセマン・プロジェクトは、アムステルダムのこうした古い町並の一角で展開されている、小地域に支援システムを組織する事業である。オランダでもモデル的な取り組みという。

目的は高齢者ができるだけ長く自宅で生活を続けられるよう支援することである。このため、近隣住民が非営利民間組織を結成し、近隣に住む高齢者に対する相談・助言、在宅高齢者へのケア・マネージメント、80才以上の高齢者宅の定期訪問、緊急時の通報システム、デイ・サービス、食事サービス、移送サービス、福祉機器の開発・作成・修理等、さらには地域内に設けられた老人ホームの経営まで行っていた。

組織の運営責任は地域住民の代表からなる運営評議会が負い、数人の有給スタッフがパートタイムで働いており、さらに多くのホームヘルパーが組織されていた。50万ギルダー（約2800万円）の基金をもつほか、政府からの補助金と地域住民からの寄付金が主な活動資金である。

この組織の特徴は設立経過にある。1978年にこの地区を通り抜ける地下鉄が建設された際、市では地下トンネルの上に高速道路をつくろうと計画した。ところが、住民にこの建設計画を提示したところ、住民たちは「高齢者は住み慣れた地域社会に住み続ける権利をもっている」という主張を掲げ反対運動を組織したのである。市ではやむなく高速道路の建設を断念し、5年にわたる住民たちと

の折衝の結果、ここに老人ホームと公共住宅等の複合建築物をつくるを決めた。この時の反対運動組織がその後発展してフレッセマン・プロジェクトを推し進める母体になった。

社会改革「オブズーメルダ・プロジェクト」（ロッテルダム市）

オランダ第2の都市ロッテルダムはオランダ最大の産業都市である。大きな港をもちオランダの海の玄関と呼ばれている。

そのロッテルダム市は今、21世紀に向けて都市経済を再生させるため企業誘致や港湾施設の更新、都市再開発などに取り組んでいる。深刻な失業問題の解決を図る狙いもある。しかし、都市再開発の推進は昔ながらのコミュニティーを崩壊させ、経済活動に対する公共投資はその恩恵を受けられる者と受けられない者との階層分断を引き起こしがちである。特にオランダ語の読み書きができない非オランダ系住民は失業率が高く、また居住地域も旧市街に集中しているため、こうした地域では社会不安にも結びつきかねない。

このため、市はオブズーメルダ・プロジェクトを進めることで「社会改革」を図ろうとしている。このプロジェクトには3つの柱がある。第1は文盲撲滅キャンペーン、第2は就労機会を公共部門に確保する施策「ジョブプール」、そして第3は近隣地区の美観維持促進のための地域組織化と資金助成である。

市はこのプロジェクトを、RIO（ロッテルダム住民支援機構）という非営利民間団体の力を借りて進めている。この団体は市や中央政府から資金を受け、ロッテルダムのコミュニティー・ワーク実践を担っている。170人を超える職員を擁し市内に5つの地区事務所をもって、住民への情報提供や啓発、地域グループの組織化などを進めている。また不動産の資産価値を高めたい企業から資金を得て職員を配置し、独自のプロジェクトにも取り組むというユニークな団体でもある。

都市のスラム化傾向とコミュニティー・ワーク（ハーグ市）

北海に面するオランダ第3の都市ハーグは、国会議事堂や各種の政府機関、各国の大使館が集まっており、いわばオランダの政治の中心地である。

しかし、ハーグは今、市中心部でのスラム化が進み深刻な都市問題に悩んでいる。端的に外国人居住者と失業者の問題である。人口44万人余のハーグに何と約8万人もの外国人がいる。その多くはトルコ人、モロッコ人、スリナム人などでオランダ語の読み書きが不自由な人達である。こうした外国人居住者の多くは仕事に就いていない。またオランダ人の中にも様々な事情から仕事に就けない市民がいる。彼らは仕事に出会えてもアルバイト程度で安定した所得がなく、当然税金を納めることもない。外国人居住者や失業者のほとんどは市の中心部に集中しており、中には住民の50%以上が外国人という近隣地区もある。麻薬患者が多いのも市中心部特有の問題である。

市の中心部でこうした現象が進むのは、古くから開発された地域であるだけに老朽化し居住条件は劣悪だが家賃の安い住宅が集中しているからである。

ハーグでは、こうした問題の解決に資するためコミュニティー・ワーカーが働いていた。ハーグのコミュニティー・ワークは、市が直接担当している。公務員の身分をもつコミュニティー・ワーカーが60人おり、市内をいくつかのブロックに分け分担して受け持っている。各コミュニティー・ワーカーは4人いるマネージャーいずれかの指揮を受けるが、通常は担当地域にある駐在事務所で仕事をしている。例を挙げると、非オランダ人に分かりやすい情報を提供するための新聞づくり活動、公園や街角の自主管理や治安維持のための活動、居住条件の悪い住居に住む移民等に健康維持を呼びかける活動、オランダ語の学習を呼びかける活動などを支援していた。

日本の現状と比べて

ロッテルダムでオプズーメルダ・プロジェクトの話を聞きながら、私が仕事をしている中野区では、地域の美化活動に取り組む町会・自治会に清掃用品の補助をしていることを思い出した。日本では地域的な取り組みが必要になると、行政は往々に町会・自治会に声をかける。それで一定の解決が図れるからである。ところが欧米には、地域を網羅的に組織する地縁団体は存在しない。このことが、コミュニティ・ワークを発達させた背景ではないだろうか。

また、日本ではコミュニティ・ワークというと社会福祉協議会をはじめ民間組織の取り組みと思われるが、オランダでは行政が有力な担い手であった。民間組織にも多様な形態があった。活動資金集めの能力がコミュニティ・ワーカーに求められる資質の一つというのもオランダの特徴であろうか。

もう一つ、日本では優れたコミュニティ・ワークの取り組みは限られたものしかなく、しかも属人的な要素が強いため専門性が認識されにくいという悪循環に陥っている。これに対しオランダでは普及した取り組みのため、コミュニティ・ワーカーを目指す学生は実習を通して専門的な技法・技術を身につけることが可能であり、そのことが専門性の確立に寄与しているように感じたのは僻目だろうか。

ハーグのコミュニティ・ワーカーが日本との交流を望んでいることをお知らせして、報告のむすびとさせていただきます。

※ 本稿は、杉岡直人（北星学園大学）編集委員が依頼して、昨年中に寄稿いただいたものですが、本号の発行が遅れましたため、掲載が本年にずれこみました関係上、文中の時点は昨年を起点にして下さい。

近刊案内

北海道地域福祉学会誌

「北海道地域福祉研究Ⅰ」が8月に刊行！

「北海道地域福祉研究Ⅱ」続刊予定

「新ケアシステムの展望」

—— 1995年度活動テーマ ——

1995年度は「新ケアシステムの展望」を研究テーマとして、下記のような骨子で日程（例会は概ね月末の金曜日を予定）および講師を調整中です。確定しましたら、順次ご案内いたします。

1. 定例研究会（案）

第1回例会（95年8月下旬）

94年度例会の総括シンポジウム「在宅ケアはどこまですすんだか」

第2回例会（95年11月下旬）

講義「新ケアシステム」（新介護システムの概要と展望）

第3回例会（95年12月下旬）

研究報告「人にやさしいまちづくり」（地域実践の事例報告）

第4回例会（96年1月下旬）

講義「ケースマネジメントの理念と構成要素」（基本事項と実践の課題）

第5回例会（96年3月下旬）

研究報告「高齢者ケアプランの試行過程から」（実践報告）

2. 北海道地域福祉研究大会（案）

テーマ「新ケアシステムの展望」

1995年9月24日（日）：講演、報告、総会を予定

1995年度 北星学園大学社会福祉夏季セミナーのご案内

1. テーマ: 「社会福祉における価値の問題」
2. 対象: 福祉関係者および市民
3. 日程: 8月21日(月)～22日(火)
4. 会場: 北星学園大学 A教室
5. 参加費: 5千円(2日分の昼食費を含む)
6. 問合せ先: 北星学園大学社会福祉夏季セミナー係/杉岡研究室まで
Tel. 011-891-2731 Fax. 011-894-3690

7. プログラム

—第1日目(21日)—9:30 受付開始、10:00 開始

- | | |
|--------------------------|--------------------|
| 講義Ⅰ「ソーシャルワーク実践における価値の問題」 | 講師 仲村優一氏(淑徳大学教授) |
| 講義Ⅱ「価値としての社会福祉」 | 講師 永田勝彦氏(北星学園大学教授) |
| 講義Ⅲ「福祉計画における価値について」 | 講師 高田真治(関西学院大学教授) |

—第2日目(22日)—

シンポジウム「福祉サービスと人権」 司会: 杉岡直人(北星学園大学教授)

シンポジスト

- ・児童の人権: 佐々木明美(チャイルド・アドボケーター)
- ・在宅サービスにおける人権の問題: 吉村信義(札幌市在宅福祉サービス協会)
- ・障害者の地域自立と人権: 我妻 武(メビウスの会)
- ・精神障害者の社会復帰における人権: 向谷地生良(総合病院浦河赤十字病院)

分科会: 10分科会に分散

北海道地域福祉学会ニュース第3号

発行日 1995年7月1日

発行者 北海道地域福祉学会編集委員会

住所 〒060 札幌市中央区北2条西7丁目 道立社会福祉総合センター3階

北海道社会福祉協議会地域部地域福祉課気付 TEL011-241-3976 FAX 011: 251: 3971